



昭和 47 年 (1972 年)
9 月号 (No. 327)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本 文

嗚呼五十年……………松方三郎…1

山と蝶のものがたり④…春田俊郎…3

山頂仏(上)……………藤島 玄…5

会員通信

走る、観る、登る……………織内信彦…2

三田会長浅草岳……………金山淳二…2

はじめてのヒマラヤ……………中垣淑子…4

Keep Japan Clean……………9

図書紹介

エベレスト南壁……………松方三郎…6

遠近の山……………浜野正男…6

その他

第10回 木暮理太郎翁

碑前こ親会……………山村正光…2

ハーディ夫妻の来日……………山口節子…3

婦人懇談会主催

ビール・パーティ……………中屋健二…5

NEW ZEALAND……………吉沢一郎…8

会務報告

岩永名誉会員

本会へ図書寄贈……………帰山 毅…6

岩永信雄氏

寄贈図書(和書)目録……………7

7月理事評議員会……………9

図書室便り……………9

ルーム日誌……………9

会員異動……………9

復活・新入会員(47・7)……………10

住所・住居表示変更……………1

上高地山岳研究所建設ニュース……………1

お知らせ……………10

上高地山岳研究所

建設ニュース

は欠くことのできないものだと思うからだ。「遺稿」は印刷部数が僅かであったから、今日では手に入らないかも知れないが、それにしてもせめて梓書房版にして欲しいと思う。その後の版には梓版に入れた挿画が無い、あの何枚かの写真に写った五十年前の日本の山々の姿は、みるからに静かで清々しいからだ。

嗚呼五十年

松方三郎

板倉勝宣すなわちワンデーが立山で遭難したのは一九二三年の一月十七日だ。来年の正月が来ると、それからちょうど半世紀が過ぎたということになる。ここにおいて、何となく「嗚呼五十年」といったような感慨がわいてくるのである。

ふだんは、十年の二十年のと考えもしないで暮しているのだが、それから五十年経ったということに気がついて見ると、思わず「嗚呼五十年」などという言葉が頭の中に浮かんでくるのである。

ワンデーは五十年前に死んだ。あのころはヒマラヤはおろか、アルプスさえも、夢物語だった。

だからワンデーはアルプスの山麓に移住して、果樹園の園丁に住みこむ手はないかと、考えたりいったことはあるが、ヒマラヤ遠征などは夢の夢、自分の仲間が世界中の山に羽をのばして散らばっていく今日このごろのような有様は考えたこともなかった。

生き残つて今日にいたっているわれわれの方はどうか、五十年前に死んだワネデーが、いつも仲間の人に死んだ自分達と一緒にいるような気持で、何となく五十年経つてしまったのだ。だからそのころの連中が寄ると、きまつて出る話はワネデーの話であり、それから五年あとで死んだ大島の話だ。また、今も札幌に行くとかワネデーのいうで、渾沢に行くと大島がいうのかのようにて。つまり彼等とは自分達と同じように、アルプスに行き、ヒマラヤに行つて、共に、この五十年を生きてきたような気持でいるのである。奇妙な話だが彼等を知る人は、こうしたい方だに無理があるとはいわなかつた。彼等が不思議な人物だったということか、山がこうした事態をもたらしただといふことなのか。

ることは、今も昔と少しも変わらない。板倉勝正君の書いたものに、「博物館」という文章がある。勝正君は「遺稿」の書簡集の中に「マサチャマ」にして登場する。今やわが日本山岳会のこと理事にして本邦有数のオリエンタリスト。ワンデーは勝正君を大変可愛いがっていた。勝正君の父上が南洋に行っていた長く留守だったことが、甥の勝正少年に対する気持を一層切実に示していた。

ところで勝正君の「博物館」はことな書き出しで始まる。

私は小学校に通い出す前に博物館に通っていた。一緒にいた叔父が上野の図書館にゆく時、三度に一度はついてゆく。すると私を向いの博物館にほうり込んで行って終

落第して一級下のぼくといっしょになった。烏打帽をかぶって浅草のオペラに凝ったり、上野の図書館通いが始まる。そして、この間にワンデーは彼らしい一個人の間人となって行っただけだ。勝正君の文章にはそのころの彼の日常がよく出ていた。自分で自分の方向を探し出して行こうといった気持がその図書館通いの中に出ていた。彼の読書範囲は相当なものだった。

午時になると図書館から出て来て、小さい甥と博物館の芝生の上で弁当を食べたり、まさにワンデーそのものだった。心の細やかさ、それでいて男らしくさうとしたところ、そんなところ

あとで『山と雪の日記』という名で

出たワソデーの「遺稿」を読んでみる。彼の文章の中に登場する人物の多くは、過去の人となっているばかりでなく、そこに現われる舞台そのものも、遠く過去のものとなって、山は同じ山でも、そこに書かれた静寂さも、清浄さも、今日ではもはや存在しない。しかもその文章にわれわれが心をひかれ

う。広い館内は人影もなく、時

時守衛の靴音が高い天井にひびくだけである。私は大抵ミイラのあたりで遊んでいる。午になると祖父が迎えに来て芝生で一緒に弁当を食う。……(中略)……叔父も震災の年の正月、立山で遭難して死んでしまった。

が彼の身上だった。

ワンデーについてはいろいろ書いてあるから繰返すまい。ただ、彼について何等かの関心のある人は、この機会に彼の書いたものを読んでも欲しいと思ふ。出来るならばあとで出た公刊本ではなく、私版の「遺稿」で。「遺稿」の方には公刊の際除いた手紙がたぐさ載っているし、彼を知る上にはそれ

ないというか、いやいよいよ実現した

神主さんの祝詞に浸りました。
のだという一種の感慨に浸りながら。
▽進行状況 その後の集中豪雨などで
やや進行状況がおくれていましたが、
目下急ピッチで進行はじめました。
八月の末には建前が行なわれる予定です。
上高地を通られる会員はぜひ立寄
つて下さい。

▽応募と入金状況 会報と募金趣意書を送ったところ、折返し一約と送金が相次いで舞い込み、委員一同喜び合っておりです。中でも入金第一号の中屋常務理事、また手紙による申込みと送金のトップ、石渡清、町田立穂、大西雄一、蓮田清、村上智一、松田章、神谷恒吾（七月二十一日現在）の諸氏には心から感謝申し上げます。

八月二十三日現在
応募件数 一八〇件
金額 一、三三七、六〇三円
目標額対比 二六・七％
まだお申込み下さっていない会員諸兄は至急ご予約下さい（ご入金は後ほど結構です）。

なおご寄付に対する領収書の裏面に使う絵として会員坂本直行さんが淡彩「かたくり」を寄贈して下さいました。おかげでちよと類のない気のきいた受け取りが出来ました。

また宿泊利用券は神崎理事にデザインして頂き、これまた立派なものが出来ました。両氏にこの紙面から厚く御礼申し上げます。（山研委・林）

第十回木暮理太郎翁

碑前こん親会

山村正光

霧の旅会、石楠花山岳会のお力ぞえを得ながら、JAC山梨支部の主催で五月の金山平に集うようになって、はや十年と数えるようになった。五月は木暮先生の命日にあたる月。昭和二十六年に、先生のレリーフが完成し、また山菜も豊かということもあって、先生をしのぶすがに開かれていくわけである。

でも最近、林道の開発によって、山の中いたるところに自動車が入りこみ、かつてJAC山梨が秘蔵していた山菜の宝庫はみるかげもなくなくなり、毎年新しいところを見つづけるのに苦労している。さて、本年集まる者こそすくなく、たが、好天にめぐまれ、五月二十日、二十一日にかけて、有井館のランブの下で楽しいひとときをもちいた。

恒例により、夕方四時半からさやかな碑前祭を行なった。昨年ひきつづき、神谷恭氏の姿がみえなかったことは残念であったが、霧の旅会を代表して、松本熊次郎氏があいさつを述べ、ならわしとなった初参加の方々の記念閉話があった。

野上成男氏が、私は埼玉出身であり秩父の山から山登りを始めた。山登りは秩父に始まり秩父に終るといわれている。木暮先生については著書を通してしか知らないが、その当時書で、中央アジアからヒマラヤにまで眼をむけていたのを知って驚いている。来年は生誕百年を迎えるが、できるならば木暮先生を紹介する本をだしたいと思っている。ますます先鋭化される山登りの風潮の中で、あらためて木暮先生を見なおす時代ではないかと思う。

つづいて、網倉志朗氏は、今晴れ上がった金峰の頂を見て感慨無量である。この塩川の下流の双葉町に生まれ、金峰山に始めて登ったのが大正十二年であった。暗くなつて増富温泉にたどりついたことを覚えていて。還暦をすぎた今、これからは郷里の山を復習のつもりであるかと思っている。還暦、と大きな体をゆっくりと動かしながら、学生のような態度で話さしな

さで、夜の部は、例年通り、山菜のオンパレードで、コックは、石垣政雄、平井和雄、内海かよ子、小野むつ子の諸氏である。

コゴミ、ワラビ、グリーンアスパラガス、沢わさび、たらの芽、うど、山いも、酢のもの、てんぷら、マヨネーズ和えとつづき、甲州名物のパサシ。今年は毎年好評を得ている「煮貝」（あわびの醤油煮）を甲府へ忘れて来たのは残念であった。

談話風発するころ、外ではヨタカ、ブッポウソウがなきだし、宴たけなわ夜はふけていった。もちろん酒は地酒、甲斐駒の麓の「七賢」、やがて、酒器ほかのオークションとなり、丹波のロケット徳利、会津本郷のぐいのみなどはいち早くおとされてしまった。次の日、早い組は六時前に山行の途につき金峰山をめざし、後発はみずがき山へと歩をすすめ、時刻にはそれぞれ帰途についた。

十年間をかえりみて、皆勤者は山村一人となり、九回参加は、松本熊次郎氏だけである。また、金峰山、みずがき山と二つを続けて登ったのは、山形不二男、川北仁のお二人である。それにしてもの十年間、おたがいに年をとったものである。それが証拠には酒の消費量が半減してしまった。口をきかせれば、老いてますます壮年であるが、やはり体の方はそんなわけにはいかないことを数字は冷酷に示している。

来年は、木暮先生生誕百年、有意義な会としたいものである。金山平のこん親会では、毎年五月第三十曜日、日曜日のなかで、ぜひとも覚えて、多数のご来食をお待ち申し上げる次第である。

参加者氏名（順不同） 田村英也、川北仁、平井和雄、山岸靖彦、野上成男、久寿米木章次郎、内海かよ子、石垣政雄、網倉志朗、松本熊次郎、渡辺弥生、石川忠、小野むつ子、伊藤信次、遠藤靖彦、山村正光、山形不二男
『山岳』第一年第三号要録版（三百部限定 千八百円）はもうすぐ発売です。希望者は代金をそえろへ。

走る、観る、登る、

織内信彦

走る、観る、登る（それに駄弁る、飲む）の我々の旅もすでに前半を終わって後半へ入りかけています。パンクパーで借りたブルース六人乗りの大型は快調で、吉田、三辺、わたしの三人が交替でロッキーマン道をひた走りに、山の中の村や、山麓のロッジや、湖畔のシャレーに泊りついで今はジャズバーに滞在。

七月二十三日にアイスフィールドからマウンテン・アザバスカを目指して三辺君とわたしとアンザレンして水河を登りましたが、いいところで雪崩にあい、クレバスの状況もよくわからないので午後一時頃状況判断をしてくだりまして。元気な三辺君は心残りだったと思うが、わたしの体力ではアイスフィールドからの往復は少し無理のように思いました。

昨日はジャズバーからマリノレイクへ車をおいてシヨベル峠へ、藤島、吉田、三辺、わたしの四人で登ってきましたが、往復六時間半、トレイルがはつきりついているので快適に歩きました。上越の山のスケールを大きくしたような長閑な山容は、二十一日にはこの四人で登った、ラーチバレーからのセンチネル峠の大岩峰にとり囲まれたのに比べると趣を異にしていました。

この峠を登った晩、パンフの飯屋で会員の田口二郎君とバツタリ、その奇遇をおたがいに驚いたところですが、明後ここを完つてロブソンへ向かいます。森林と、湖水と、氷河の我々の旅は、ブルームスの快走とともにすこぶる快調です。

三田会長 浅草岳へ

金山淳二

浅草岳を中央で紹介されたのは藤島敏男さん、積雪期は大島亮吉さんだが三田会長はまだ登っておられない。それで一度は、との念願で六月五日立山登山研修会の帰途長岡へ立寄られた。すぐその足で山麓五味沢の乙松荘へ急ぐ。案内役は慶応山岳部OBの老超猛者笠原藤七さん。それに長岡の岳人連、入広瀬村役場の人達も特別参加で十数名。翌日は越後のドンヨリ空も会長に敬意を表して無風快晴。三十分ほど車を走らせてからしばらく歩き出す。この辺はブナの原生林だったはずなのだが、今では見るも無惨な栄養不良の杉苗の植林地帯、藤島さん、大島さんは何と嘆かれることかとシユンとなる。我々が車を走らせていたいた赤土の道もブナ材切出しのために林野庁様が建設されたもので、年々先へ先へと延びている。浅草岳の樹海を切り終るにはまだ二年もかかるか。早くおいでと言ったところ。

お蔭で終点から三時間の歩きで、十一時には頂上へ立つことが出来た。頂上付近はその名の如く、浅い草の原。残雪で冷したビールやジュースを役場のサービスでいただく。雲もなく一時間は眺めでたい食べたりして、こんどは会津側、昨年改修されたばかりの歩きにくい急坂を下る。いやな路だが、鬼ヶ面の岩壁を真正面から眺められるのが救い、登る路ではない。

下りも三時間かかって、只見線田子倉無人駅へ出る。山から下って大きな湖へ出る気分は悪くないが、昨年開通したばかりの駅で人家は一軒もなく湖畔に半地下の駅がぽつんとあるだけ。時節柄、釣りと山菜とりの車は何台か

あった。

それから、越後・大白川駅に二十分も六十里越えのトンネルを通過して一駅戻り、そこで登山隊(?)は解散、車で長岡へ直行する。

長岡では八方台休暇センターに三人だけで泊り、翌日の午後三時まで印度やヒマラヤの話や先輩、後輩の消息など語り合い、魚沼三山縦走の密約が成立した。

なお、この八方台休暇センターには日高さん、横さんはじめ石原憲治さん、山崎安治さんなど大勢の方々が見えていたことを付記します。

また、浅草岳については『山岳』十

明治三十八年十月十四日、日本博物学会の第十三回の例会が開かれ、市河三喜、河田黙、高野鷹蔵、武田久吉、梅沢親光、内田清之助他六名の会員が出席し、高野が「塔ノ岳採集の話」という講演をした。実はこの日、散会后、別の席で山岳会の発起人会を開いて、いよいよ日本山岳会を発足させるということになっていた。高野はこの講演の末尾に「この採集旅行の詳細は近く、山岳会から発行される『山岳』第一号に書くから」とつけ加え、山岳会の発足を会員に知らせた。

博物学会の例会が終わると、河田、高野、武田、梅沢の四名は、今の飯田橋の近くの富士見楼という料亭に急いだ。そこには小島久太、城数馬、高頭仁兵衛の三人が、山岳会発足の最終的打合せのために待っていたのである。そして日本博物学会の支会としての『山岳会』について、会費、会員募集、機関誌『山岳』の編集、会の運営および事務所などについての最後の合意を見て、この日が日本山岳会の創立という歴史的な日となり、この富士見楼に集まった七名が、そのまま発起人となったのである。

九年一九三三ページ藤島敏男氏「五月の山旅」および「登高行」七年、年報欄十二ページ大島亮吉氏「守門 浅草岳 四月上旬」を参照願います。

(一九七二・七・三)

ハーディ夫妻の来日

山口節子

ニュージーランドのノーマン・ハーディさんが二度目の来日をされた。最初は一九六一年十二月で、マナスル隊の方達と会われたり、ニュージーランドへでかける佐藤テルさんのパーティー

と冬の富士山に登られた。

ご承知のようにハーディさんは一九五五年チャールズ・エヴァンス隊のカンチエンジューンガ登頂者であり、その後国内での登山指導やネパール、南極などでの活動が続けられて、若いクライマーの間で非常に人気のある登山家である。現在はニュージーランド山岳会の副会長をされており、来年会長になるの筈である。ニュージーランドで山登りをした日本人はみんなハーディさんのお世話になってしまふ。五年前真夜中のクライストチャーチ飛行場に、真紅のコートを着た美しいコリー夫人といっしょに大きく両手を振

と冬の富士山に登られた。ご承知のようにハーディさんは一九五五年チャールズ・エヴァンス隊のカンチエンジューンガ登頂者であり、その後国内での登山指導やネパール、南極などでの活動が続けられて、若いクライマーの間で非常に人気のある登山家である。現在はニュージーランド山岳会の副会長をされており、来年会長になるの筈である。ニュージーランドで山登りをした日本人はみんなハーディさんのお世話になってしまふ。五年前真夜中のクライストチャーチ飛行場に、真紅のコートを着た美しいコリー夫人といっしょに大きく両手を振

山と蝶のものがたり 4

日本山岳会の発起人

春田俊郎

登山の先覚者で実力第一の小島久太、最年長で社会的地位もあり、山岳会の事務所をも提供した城数馬、それに山岳研究の第一人者で会の財政面を支えた高頭仁兵衛の三人の功勞によるところ大であることは勿論であるが、もし博物学会同志会がなかったら、山岳会も容易に発足し得なかったであろう。また当然山岳会の発起人として充分の資格と実力を持っていた人々のうち

までの三年間、地方の高校に在学していたので、山岳会の創立の折には東京にいなかったためである。矢野は山岳会の発足を知らず、直ちに入会し(会員番号十六番)ている。鳥山は日本博物学会同志会の重鎮で『博物の友』の編集責任者となっていたので、同志会の方に専念するために発起人にならなかった。鳥山はやや後れて翌年の五月に入会している(会員番号七十三番)。

って迎えて下さったハーディさんは、印象深く忘れられない。初めて外国へ行った私たちが全く不安もなくのびのびと三ヶ月過ごせたのはこのあたりの印象からだったにちがいない。今回の来日は、本職の土木建築関係の視察のためソビエト、ヨーロッパ、アメリカなど三ヶ月にわたる旅行の途中、五月二十日から六月七日まで日本に滞在されたもので、夫人も同行された。(ハーディ夫妻は一九五五年、クーム地方で約一年間シェルパと共に生活され、夫人はハーディさんの著書『ネパールの高地にて』(神原達訳)の重要な部分を記していらる。現在小島は矢野と同様、東京を離れて北大に入学、昆虫学の研究を続けながら、マツカリスプリ(羊蹄山)などに登っていたが、山岳会の創立には関与しなかった(翌年入会)。

山岳会が発足したといっても、ラジオもテレビもない時代であるから、会誌『山岳』一年一冊が発行されるまでは、発起人が山好きの友人に伝えたり誘ったりするだけで山岳会の存在を知らせる手段であった。『山岳』一年一冊は翌明治三十九年の四月に発行され、事実それに小島久太がKKの名で「本会の創立」という題で発足を宣言している。しかし博物学会同志会では、明治三十八年十一月二十五日発行の『博物の友』第五年二十九号の会報欄で「山岳に關係せる一切の事を研究する目的を以て本会内に『山岳会』と称する一支会設立されたり」と山岳会の創立を報じている。そしてその号の表紙の裏面に「日本博物学会同志会、山岳会に入会するものは会費を低減して年額八十五銭とするから、ふるって山岳会にも入会するように」という趣旨の広告が載っている。(文中敬称略)

山へは佐藤テルさん、山口のほか会員の小原夫人、増田洋子さんが同行して下さった。(この立山行ではお二人のキャラバンシューズを佐藤久一朗さんにいただき、ソビエトにもお持ちになった。)途中長野では六六年名古屋隊の太田徳明さんの旅館でお世話になり、六五年の長野岳連のメンバーもお集まり下さって初日では大変楽しい旅行であった。立山では中田富山支部長のご配慮で、野島、石坂さんがずっとご案内下さり、天候にも恵まれて五月の立山を充分楽しむことができた。特にお手配により黒四ダムと黒部貫光の東洋一といわれるケーブルカーの設備を遠山、石黒氏のご説明ですべて見せていただいたことは、ハーディさんにとって思いがけない得がたい機会だったと思う。また二十六日高山への途中富山の黒部貫光本社を訪問、本田技術部長に設計段階からの詳しいお話を伺うことができた。二十五日は西野間所長のご好意で文部省登山研修所を見学後一泊させていただいた。

高山からは名古屋隊の高橋、吉見、鈴木、木村さんと東京隊の秋田しおみが車で白川郷、御母衣ダムへご案内した。京都では本法寺に宿泊、朝のおつとめにも出られ、午後わざわざ迎えに来て下さった津田さんの車で神戸へ向かった。神戸では登山研修所見学後、山仲間といっしょに神戸市長の晩餐会にご招待いただき大変すばらしい会だったとのこと。すべて津田さんのご配慮によるものである。翌朝関西汽船くれない丸で神戸港を出航、のんびりと別府への船旅をされた。霧で遠くは見えなかったが、資料の整理や手紙書きで有効に過ごされたようだ。別府からは新貝さんがすっかりお世話下さり、阿蘇経由福岡へ。六月一日博多発岡山経由の新幹線で浜松泊。浜松駅には静岡支部の牧野さんが出迎えて

下さった。翌日第一商事斎藤氏のご案内で養鰻物を見学(ニュージラントでは鰻を食べないが、義兄に当る方が鰻の輸出をしていらっしゃるのだ大変興味をお持ちのようである)。帰路の新幹線は会員の湯川さんのご好意で運転席で長時間説明していただくなど、会の皆様は六月五日小集会で南極とニュージラントの山のスライドを映していただいた。ハーディさんは技術指導などにも非常に力を注いでいるので、時間があればもっと実のあるお話を伺えたのに残念だった。その後ブリガンドでの会食には深田夫人や明大隊の高橋、節田さんも出席され思い出話でおそくなつて、葉山へは終電車でお帰りのなつた由。六月五、六日は横山、大築氏の案内で、新宮殿新宿プラザ・ホテル、東京海上ビル工事現場、千葉市内での新工法による建設工事見学など、ハーディさんの収穫は大変な量となり、記録されたカセットテープはこの日だけで二、三本ふえたようだ。

ハーディさんはたぐさんの新しい友人(「ナイス・ビーブル」)を得て六月七日お元気に羽田を出発、ソビエトへ向かわれた。ニュージラントでお世話になった仲間が、いろいろな場所までハーディさんと再会できたことは本当にすばらしいことと思う。会の皆さま、特に吉沢副会長、中田富山支部長、神戸の津田さん、末松福岡支部長そして終始あたかくバックアップして下さった小原ご夫妻に、心から御礼申し上げます。そして、はじめから終りまで通訳まで兼ねてお世話だった佐藤テルさんをはじめ、ご協力下さったアランギ族の皆さん、本当にご苦労さまでした。

「ハーディ夫妻を福岡に迎える」新貝勲執筆原稿は次号に紹介。(編者)

はじめてのヒマラヤ

中垣淑子

五月のゴールデンウィークを利用してランタン谷をキャンピングギンバまで歩いて来た。往復十二日のギンバ(ゆっくり)トレッキングである。同行者は斎藤桂女史。シェルパはアンツェリン、息子と息子のドルジェ、それにタマン族のポーター。初日、カカニ峠を越えた所でジープがパンク、スベアのタイヤも使い物にならず、三四度の炎天下をトリスリバザールまで歩け歩けとなった。このロスで最初予定していたゴザインクンドは諦めてランタン谷に方向を転じる。

トリスリバザールから北へ北へとトリスリ川に沿ってチベットに通ずる通商路を行く。急坂もなく玉羊歯や蓬の繁る道はところどころに菩提樹が枝を拡げて格好の休み場を作っている。陽気なポーターはタマンの歌を歌う。朗朗としてなかなかうまい。

ガランの部落を過ぎた所で前方にランタンの白い山なみが見えた。このあたりは段々畑もなく樹々の緑が豊かで美しい。一人でスケッチしているとドルジェがやって来てもうすぐチャンが来るという。しばらくしてアンツェリンがチャンの入ったやかんをぶら下げて現れた。実はガランの前の部落で斎藤女史はシェルパ達とチャンを飲んだとご気嫌だったのを、いつも先にすたすた行ってしまう私の飲みおくれた顔がいかに残念そうだったとかで、アンツェリンは次のガランの部落ではチャンがあるかと一軒一軒尋ねて回りついに最後の家でマックイチャン(とうもろこしのチャン)を作らせたのだという。はじめて飲むチャンの味は格別で連日の暑さに参っていた身体も生

き返る思いがした。

アンツェリンはマナスル、P29、マカルーなどで日本人にはおなじみのシェルパ。P29隊のS女史のネーム入り赤いサブザックに日本製こもり傘というスタイルの彼に斎藤女史はミスターSの名前を進呈。息子足を痛めた彼のザックを背負ってやり、ポーターの荷が重いとくらくらか持てやったりなかなかな面が見え。天幕を張る時は「今日はガネツェンが見えますよ」などと一番眺めのいい方向に入口を向けてくれる。ポーターもまめめめしく動く。私達が洗濯しようとするばメンサーブと飛んで来る。寝袋をたたんだら、サブザックを背負うのまで手を貸してくる。こんな調子では日本の山を天幕をかきいで歩くことなどできなくなるのではないかと心配になってくる。

ドルジェは私達と一緒に歩きながら竜舌蘭の繊維はロープにするのだとか松はランブがわりに燃すのだとか、煙草代用の草、紙の原料になる灌木、胡椒の木と一つ一つ教えてくれる。木苺やいたどりを採ったり、私のネパール語の発音を直したり、長い休みになると自分の生い立ち、家族のことなど話す。二十五歳で二児の父というが体格があまり良くないので少年のように見える。「ドルジェ、オトウサン遅いわね」「オトウサンは多分下の河原で休んでいると思います」そしてポーターを連れたアンツェリンの姿が見えてくると指をくわえてピーッと鋭い口笛を吹く、父親もこれに応える。

緩やかなトラバースを続けてダウンチェンのチェックポイント過ぎると五〇〇mほどぐんと下って沢を渡り、四〇〇mほど登る。この沢はネパールの地図には「トリスリ・コーラ」とあるがアンツェリンは「ティガリ・コーラ」と言う。シヤブルペンシからはチベッ

トへの道と別れぐんぐん登ってランタン谷右岸の長いトラバース道を行くと、カナダ山岳会のおおきく達に会った。ピンクのブラウスにブルーのショートパンツといった姿の彼女達は「私は六十六歳」「私は七十四歳」これからゴザインクンドを回るのだと意気盛んである。

次第に谷が開けて牧歌的なランタン村では新雪に見舞われた。うすうすと積った雪の中に紫のイリスの花が沢山咲いていた。標高四八〇〇mのキャンピングゴンバまで行くところランタン、キンシン、ランシン・リ、ガンチェンポと六七〇〇m級の山々が並んで見事である。ここで私達は引き返した。

はじめてネパールヒマラヤに入るのだということで経験者から生水は飲むな、現地食をやたらに食べると下痢をする、と注意された。しかし私が食いたん坊の上に相棒が自称クライマ(クライマーに非ず食らい魔)の斎藤女史である。暑さに耐えかねて飲んだジュースが濁ったトリスリ川の水でうすめたものと知ったのは再びトリスリバザールに戻って来た時のこと。ミルクティからはじめてチャン、ロキシー、ヤクのヨーグルト、ツァンパ、チャパティとシェルパやポーターの食べ物にはひと通り手をつけた。カンパに薬を所望された抗生物質などを寄贈した時はチベッタンティとアタのロールパンを御馳走になった。が私達はほとんど食意地が張っていたとみえ何でもラムロ(結構)である。あかざのおひたしを作らせた時はアンツェリンの方がお腹を指して「ベイン?」と心配する有様。中でもおいしかったのはポーター作るところのポーターカレーだった。皮つきじゃがいも、玉ねぎ、んにく人参、カリフラワーの葉などをきざざく切って油とカレー粉でいため、唐辛

子、岩塩、スパイスを入れて煮ただけのカレーは口の中が焼けるように辛くて最初は水なしでは食べられなかったのに馴れるとカレーがなくては物足りない。「メンサーブ、ポーターカレーを食べますか」とドルジェは必ず彼らの分を分けてくれたものである。カトマンズに帰ってからレストランでカレーを食べた。さすがに味に円味があってポーターカレーの比ではない。がやはり私はシェパやポーター達と食べたあの単純なポーターカレーの味が忘れられない。それは素朴で陽気な彼等の味だからなのだろう。

婦人懇談会主催

ビール・パーティ

真夏とはいえ、意外に涼しい夕であったが、広くもないルームの中は、ク

山頂伝(上)

藤島 玄

『山岳』の初期の号では、日本の名山霊岳の山頂において、見える限りの山々を注意深く観察した敘景が多い。こうした木暮理太郎氏の紀行文を近頃見かけないのはどうしたことだろう。登山が容易になって普遍化した現在、物珍しさにあれこれ指呼する長談義が敬遠されたのか、無関心なのか、五十万から二十万分の小縮尺図に見透し線を引いた地形図を掲げる登山者に会うのも極めて稀である。明治・大正時代の山頂展望の報告者の脚下、あるいは腰掛けになった石祠、石仏、銅像などが祭祀されてあっても、ケルンなみに無難作にみられ勝ちであった。いわゆる近代登山の先駆者たちは、自然科学に重点をおき、人文科学を軽視または無視しようとした傾向がある。こうし

たらが活動しているにもかかわらず、適当なビール温度になつていないものの会合とはちがって、婦人懇談会の主催だからあたりまえといえはあたりまえのことながら、ご婦人の数が多く、来会者六十数名の内、二五パーセントは女性であるので、賑かさも、なごやかさも、その名にふさわしい楽しい集りであった。中には、かわいい子供さんづれもあり、良きババプ、ママぶりを発揮されるのもまたほえましい限りであった。

入口近く、生ビールの大樽がデンと腰をさす、テーブルの上には、オデン(関西風)、カナッペ、サラダ、エダマメ、オープン・サンド、サンドイッチ、ユデ卵、ジャガイモ、スシなど文字どおり、山海の珍味^①がならべられた。特記すべきことは、この内、スシを除

た風潮は一般化して文化・文政を最盛期として、終戦後まで辛うじて残ってきた石祠、石仏、銅像、石灯籠、鉄剣、銅鏡の類まで減尽しようとしているが、新設は殆ど見ていない。

この間、第三回現地支部長会議に出席した。島海国体の二十八年来の島海山を、かねて歩いてみたい矢島登山道を登ってみた。山野に働く秋田の女衆はハンコタンナの黒覆面は変りなかつたが、民家の屋根はカライトタンとなつて、霧に巻かれた板川ヒュッタンまで車で行きながら、国体登山のときは、道辺に破れ草鞋のあったのを思った。

島海登山の日は快晴。樺が岳樺に代わり雪溪が続くのを見極めると、交通事故の後遺症で手足の不自由な私と、トラシパー^②交信のうるささに恥れ返って、新潟から運転してきた若い会員は先へ行ってしまった。こうなると大勢の中の単独は気楽でよろしい。マイペースで歩きながら「頂上伝」、「頂上の神仏」、「頂面」と、題目やら内

いてすべてが婦人懇談会のメンバーによる手づくりのお料理だったということである。ふだん、うまいものを食べたことのないI君などは、感激してこれで五百円とは、うす気味が悪いといっていたくらいであり、おくれて来たN君などは、会の終了時刻が七時であるにもかかわらず、八時になつても帰らず、オデンの残りをばくついていくくらいである。あらかじめ、このことを察知していたのか、大阪からも上京して参加した会員がいたことも付けくわえておかなければならぬことと、とにかく和気あいあい、たらふく飲んで、たらふく食って、だべりあい、満足この上もないという集りであった。

出席者 板倉勝正、坂下心一、山崎金次郎、朝井一男、山崎安治、鶴岡元

(中屋健次記)

容やらを、お題目や懸念念のように繰返したりした。長大な雪溪を一直線に横断して、登山道と相対する尾根に取付く。静岡支部長の朋さんが、足をいたわる娘さんと休んでいた。それより意外だったのは、びっしり厚く敷きつめた稜線のすべてがイワウメとコケモモであつて、それが外輪山の頂稜まで続いていた。外輪山の縦走でも内壁の一部分にも見えていたが、これほど美事に濃緑の厚葉を繋ぎ重ね合せて杖を突いても靴に踏まれば、跡も残さず弾き返す密生地帯は他に知らない。

「ではお先に」とまた一人になる。コケモモの去年の紅い実、咲きだしたイワウメの白い花、そして黄花のミヤマキンバイが散点していた。外輪山の一段に出て、鳥ノ海と鍋森に久潤を叙したとき、足元に一片の木札が散つていた。亡き人の戒名と記し冥福を祈る祈符札が、吹き飛ばされたのであろうと石に囲って立ててやる。内院巡りの一部であろうか、崩れた内壁の中に微か

之助、松本善二、鈴木三郎、塩田良伸、村尾金二、宮下秀樹、三田幸夫、近藤信行、桜井善志、伊倉剛三、松本熊次郎、松本宏、名児耶達男、諸岡一、太田敏、金坂一郎、小野利次、白井由美、大倉元子、高橋真理子、奈須文枝、漆原知子、渡辺正臣、麻生武治、越川昌子、堀内章雄、北島光子、瀬名貞利、西尾久子、清水春美、木村勝久、田村扇一、柳宏子、浜田一馬、野口末延、川上忠義、今井雄二、今井喜美子、山村正光、中屋健次、堀内位智子、塚本晴雄、吉田武志、酒井忠義、早川元、牧野雄、山下一夫、武田満子、岸山、山口節子、久野英一郎、黒石恒、芳野菊子、勝田房治、堀山毅、松永康子、松永新平、大野義徳、大柳豊太郎、宅間清子、宮崎英子、須田紀子、斎藤桂。(以上六十八名)

な跡踏を辿って七高山に出た。

七高山の頂上にあるものは、抜き出された一等三角点標石と、四倍大に變形した標石だけで、束になつてあつた祈符札も、祭祀の神仏は一つも無くなつていた。お喋りと食うのと飲むので賑わっているだけである。旧知の新山を往復する気持は初めから無く、樺の大森林が続くわたる百宅道を下つてみたかったのでぞきむ。幻の森林は伐採され尽し、牧場のように拡がり、案内人もいなければ、山岳展望を正確に説明する人もいなかった。

黙って一人で下る。八割は雪溪の下山路は、滑らぬよう、転ばぬように歩くだけでよい。何を考えようと勝手にある。心は山麓の村人とよく山を歩いたころに遡る。村人がこの樹に、この岩に、神かまたは仏がいる、と笠を脱いで手を合せる。(次号完結)

高所登山技術考(3)(村井葵)は次号掲載いたします。(編者)

越後の国境踏査報告書

越後山岳 第6号

日本山岳会越後支部編

越後衆の鈍と根

深田 久彌

昭和四十年六月、日本山岳会越後支部佐渡総会に、新潟県全踏査縦走計画の発表があった。五万分の一の断面図が、パノラマ風に巻紙に描かれたのを、部屋の一の壁から延々と次の壁に移った時、私は思わず笑いだした。感嘆でも恐怖でも、度をすぎると笑いだしたくなるものだ。

こんな途方もない思いつきは、越後衆の「鈍」なら、それを本気に実行したのは、越後衆の「根」であろう。越後名物の猛烈な数濃ぎ、迷路のように錯綜した尾根、越えねばならぬ無数の突起、こんな山歩きは酔興でできることではない。この縁の下力持ち的な仕事には、派手な海外登山に劣らぬ努力と闘志がいる。

越後支部にはそれがあつた。身心共に強靱な団結と融和の「底力」というより養力があつた。

六八年九月 A5版 本文五三八頁 写真一七頁 地図一〇図 五一五〇〇円 一四四〇円

ふるさとの山

中村 謙著

上越の山 一三〇余コース
信越の山 六〇余コース
佐渡の山と山の伝説
七〇年二月 A5版 本文四二一頁 写真二頁 地図二六図 三八〇〇円 一四四〇円

新潟市学校町二 富士波出版
振替 新潟二七四番

図書紹介

エベレスト南壁

P・スチール著
丹部節雄訳

ピーター・スチールのエベレスト隊の報告は、隊附ドクターとしての私的報告だが、隊としての公式記録ではないが、ヒマラヤ登山隊の記録として、大いに注目されるべきものだといっている。のみならず、前のブライタン紀行(会報三一〇号「医者、医者、本だ」参照)と同じように大変面白い。不幸と不運続きの中で悪戦苦闘した国際隊の報告を、面白いといっているが、局外者の第三者的興味からではなく、もっと立入った親味の気持ちで読んでみて、こうした国際隊の難しさ、ああした高い所で進むの難しさ、その他いろいろ、どこかのヒマラヤ隊にとっても深い関心事である。たぐさんの問題が、平静に、当事者として陥りやすい主観におぼれることなく書かれているという点で、高く評価されるべきものだ。

ドクターの報告だから、この方面の報告が何としても一番の値打ちであることもろろだし、その意味で高所医学に関心のあるわが国のドクター諸兄には是非読んでもらいたいものだ。そして専門家の立場からのコメントが聞きたいのである。というのは、この隊ほど事故続出した隊は多分前例がないと思うからだ。国際隊は病気のために崩壊したということがある。ヒマラヤ遠征隊にドクター無用論があったこととして今日もあるであろうことはご承知の通りだ。つまり、遠征隊で致命的といったほど病気になるやまされた経験は、これまで無かったのではない、か、という主張なのである。ところが今度のエベレスト隊は隊長が腺熱で戦線を離脱せざるを得なかっただけでなく、実にたぐさんの病人を出してというのだが、英仏独伊の各国語を自由に操り隊長自身が隊員相互のコミュニケーションの中心的作用をせざるを得なかった。この不幸は、そのままた隊の不幸だった。この間の事情は植村君の話などから、われわれも聞いていたことだったが、病人は隊長だけではなかった。

ラテン系の諸隊員とアングロ・サクソン系の間の感情的亀裂なども、半分から、またはそれ以上、高所医学的角度から検討されるべきものであったかも知れない。六千mからそれ以上に行けば、大方の人間はそうした弱味を暴露するほど弱い動物になるのかも知れない。自分をかりにあの国際隊の立場において考えるとき、おれは大丈夫だという人が果して何人いるだろう。

スチールの今の本を読んで思いついたのは、かつてマカルーの初登頂のあとで、隊長フランコが新聞記者にいった言葉だ。

折角が大してお話するような面白い話題は無い。

まあ幸福な結婚のようなものだ。

こんなことばだったと思う。一九七一年のエベレスト隊は、その点、不幸にして話題が多すぎた。しかし山の経験者、山登りが如何に天候に、またその他、人力の何ともし得ない要素によって支配されるか、そしてヒマラヤなどではそれが遠征隊の運命を決定する場合が少なくないことを知っている筈だ。読者はこの点を十二分に弁えた上で、この遠征の記録から学ぶべきものを学ばせよう。われわれに教えるものを提供してくれる点では、成

功した遠征よりも、不成功に終わった遠の方が、遙かに多いといってもよいかも知れない。

われわれとしては、当然のことながら、わが植村、伊藤両君の活動振りが如何に報告されているかは何よりも大きな関心事だが、スチール自身は例の四人組が、南壁の上の方で猛奮闘していた最後の段階では、B・Cで多忙を極めていたのだから、彼の筆から多くを期待するのは無理だ。とにかく両君の健闘ぶりには舌を巻いたようだ。

こうした内容の本に『エベレスト南壁』という表題をつけたのは多少ズレた感じを与えるが、その点は商業政策上のこともあってのことと了解して、読者はこの本のほんとうの値打を評価すべきだろう。

スチールが一人で、本隊を追ってナムチエバザールからB・Cに登っていくところの一節は、まことに印象的だ。できるなら大遠征隊附のドクターなどでなく一人で、そんなよく出ていてみてみたいという気持がよく出ていて興味深い。エベレスト街道などといわれて、気の早い人にはエベレストも俗化せりなどと簡単に片づけられかねない今日この頃だが、あそこはスチールならずとも、ロイツェの尾根やアマダブラムの氷の塔を見上げながらしんみりと静かに歩いてみたいところだ。

昭和四十七年七月 時事通信社刊
本文三三五頁 定価 九〇〇円

遠近の山

竹節作 太著

本書は著者の『遠近の雪』の後編といふべき一編である。『雪』の方はスキーを主とした本の様だが読んではいない。実は本書の評をたのまれたので

節さんのゴルフの親友の秋田氏からこの本を借用したわけである。それなら『雪』の方も一緒に持って来てくれたので二冊でいいことが分ったわけである。節さんとはナンダ・コッタからの知り合いだけに、その評を書くのは一寸やりにくい。

数々のヒマラヤの報告書を手にするが、行動表だとか食糧表だとか何だとか、あまりにも事務的すぎて、素人の人には興味乾燥な文章が多すぎる。報告書ともなると、あの様な型にならざるを得ないのだから。その点ヒマラヤのベテランで、新聞社の運動記者であり、スキーのオリンピックの選手で、人間離れした体力(むしろ馬力)の持ち主である著者が、さらさらと少しも淀みなく書き流したままの文章は、又別の意味の魅力がある。前編のナンダ・コッタ部分は、彼の戦前の著書『ナンダ・コッタ登攀』を主としたものに手を加えたものである。私としては、なつかしい文章に接した気分だ。というのは前述の本が殆んどお目にかかれぬ珍本になったからだ。三十年も経った現在でも山麓の旅の文の中にキラリキラリと何か光るものを発見するのだから、大したものだ。

マナスの何回かの計画にも参加する著者が、唯一一人で今西さんの本隊を追いかけてネパールの旅を続けてゆくところなどは、他の人には書けない味のあるところだ。節さんが、独りで心配したり、怒ったり、喜んだりするのがよく分る。この本の中で一番うれしかった。また、一番最後のところでは、ヒマラヤ登山隊の編成が、だんだん大型化し、隊員を集めるのも各界、各団体からの結集隊となり、人の和というもの、が最もむずかしいのだと述べている様だ。確かにその後のエベレストににしてもそうだが、気心もよく分らない者同志が、一緒になって、大きな山を

攻撃するむずかしさ、それらの人々をコントロールするむずかしさを『和』という文字で表現している。自分自身が突然腹が立って、後で考えたら常識を超えた行動に出たことを反省し告白している。

著者は新聞記者であり、かつ登山隊の一員でもある。そして更に遠征隊の企画立案者の一員でもある。その登山記事はその新聞社の「独占記事」といういわゆる営業的な面からいえば他にない大きなプラスを表現する指命を帯びているのである。

一般的にいってヒマラヤ登山者とは自ら異なる。自分の仕事を含めたものも混っている。したがって速度が必要なのだ。節さんは原稿を書きながら、日本に送り活字となる。それを集めて編集すれば、帰国後直ちに一冊となる。登山隊の報告書は早くして一年、おそいのは忘れた頃出るのが普通だ。

この一冊はその意で、ナンダ・コッタとマナスの内話と、当時の速報を集成したといってもいいだろう。私にはなつかしい本である。そして著者の人間業でない馬力を感じる。登山専門家でないヒマラヤ狂いが、半生を費し残した一冊だといってもいいだろう。おそろくこのような類の人間は一寸もう出現しないであろう。

昭和四十七年三月 スキージャーナル刊 四六版 三七七頁
定価 一〇〇〇円

岩永名誉会員

本会へ図書寄贈

本会初期会員一人である岩永信雄氏は、昨年名誉会員となられたことを記念して、かねてより氏愛蔵の図書を本会へ寄贈する旨申し出があった。六月八、二十六の両日、近藤、野上

帰山の三名が出向き、四百冊余の寄贈図書を受受、無事本会ルーム談話室に収蔵しおえた。

その折、岩永氏から古き良き時代の山のことや、すでに故人となられた本会初期会員の方々の話とともに、当時三度目の来日中であつたウェストンの講演をきき、氏がいつそう山への傾倒を深められたこと、三ッ峠が氏の開拓によるものであつたこと、エベレストに深い関心をお持ちであつたことを聞き、感銘を受けた。

岩永氏が黒部溪谷のバイオニアの一人でありかた冠松次郎氏のパートナーであつたという程度の知識しか持ちあわせなかつた筆者は、冠氏が数多くの書物を出されたかげにあつて岩永氏がひっそりと多くを知られずに今日にいたつたことを残念に思う。ぜひ、多くの若年会員諸氏にも、氏の歩まれた歴史を語りつがれんことを切望してやまない。

なお今回、左記の図書のほかに、岩永氏の本会入会許可証や会員証、フィンチから岩永氏にあてた手紙などもあわせて寄贈いただいたことを附記しておく。(帰山藪)

▼岩永信雄氏寄贈図書▲

(和書)

- (1)冠松次郎著『峰・溪々』昭13 書物展覧社刊
- (2)冠松次郎著『黒部溪谷』昭3 アルス刊(著者署名入り)
- (3)冠松次郎著『双六谷』昭5 第一書房刊(著者署名入り)
- (4)冠松次郎著『黒部』昭5 第一書房刊(著者署名入り)
- (5)冠松次郎著『飯岳』昭4 第一書房刊(著者署名入り)
- (6)冠松次郎著『山の味谷の味』昭27 文徳社刊(著者署名入り)
- (7)冠松次郎著『黒部溪谷』昭32

明文堂刊(著者署名、自作歌入り)

(8)冠松次郎著『黒部溪谷』昭33 明文堂刊(著者署名、自作歌入り)

(9)冠松次郎著『溪』昭37 筑摩書房刊(限定版署名、歌入り)

(10)冠松次郎著『黒部』昭40 名著刊行会刊(限定版署名、歌入り)

(11)冠松次郎著『続黒部』昭41 名著刊行会刊(限定版署名、歌入り)

(12)冠松次郎著『山溪記』第一(第五巻 昭42) 春秋社刊(署名入り)

(13)辻村伊助著『スウィス日記』大11 横山書店刊

(14)松方三郎著『アルプス日記』昭12 竜星閣刊

(15)鹿子木員信著『ヒマラヤ行』大9 政教社刊

(16)鹿子木員信著『アルペン行』大3 政教社刊

(17)原口亨著『赤石白峰山脈縦横記』大7 洛陽堂刊

(18)渡辺十郎著『風景の科学』大13 新光社刊

(19)窪田空穂著『山岳紀行』昭33 春秋社刊

(20)村木潤次郎著『ヒマルチュリ』昭34 毎日新聞社刊(著者署名入り)

(21)ヒラリー著、松方・島田訳『わがエベレスト』昭31 朝日新聞社刊

(22)横有恒著『わたしの山旅』昭43 岩波書店刊

(23)百瀬慎太郎著『山を想えば』昭37 百瀬慎太郎遺稿集刊行会刊

(24)日本山岳会編『マナスル一九五四〜六』昭33 毎日新聞社刊

(25)井田清著『山詩集』昭6 山と雪の会刊

(26)加藤美倫著『高原のささやき』大12 改造社刊

(27)依田孝喜編『マナスル写真集』昭31 毎日新聞社刊

(28)東大カラム遠征隊編『バルトロカンリ』昭39 日本放送出版協会刊

(29)東京帝国大学スキー山岳部編『スキーイング教程』大13

(30)滝谷一『一九五九年十月十八日』昭35 東京大学運動会スキー山岳部刊

(31)別宮俊追悼集『昭34 別宮俊追悼集編纂委員会刊

(32)大嶋孝吉著『スキー術階梯』大11 山とスキーの会刊

(33)『奥羽の山々』昭14 秋田宮林局刊

(34)串田孫一編『山一三』昭36 筑摩書房刊

(35)高頭式著『日本山嶽志(覆刻版)』昭45 野島出版刊

(36)毎日新聞社刊『エベレスト』昭45 日本山岳会編『一九七〇年エベレスト登山隊報告書I・II部』昭47

(38)日本山岳会編『山岳』第一年第一号(覆刻版) 昭47

(39)日本山岳会編『山岳』一第三年第三号(第三十七年一第一四年第一号) 第六五年

(40)東京商科大学一橋山岳部編『針葉樹』第三号(昭2)、第五号(昭5)、第九号(昭12)

(41)三高山岳部編『三高山岳部報告』一第五号(昭2)、第六号(昭4)

(42)東京帝国大学スキー山岳部編『部内雑誌』一、一九三六・三、一九三九・二、一九四四、一九四五・五二、一九五三、一九五七・一九五八、一九五八・六、一九六二

(43)『東京大学山の会会員名簿』昭22 昭34 発行

(44)台湾山岳会編『台湾山岳』一第二号(昭2)、第三号(昭3)、第四号(昭4)、同山岳会編『台湾山岳集報』一第四年四、五号(昭7) 同山岳会編『新高山のしおり』昭7

(45)日本山岳会越後支部編『越後山岳』一第五号(昭30)、第六号(昭43)

(46)下越山岳会編『飯豊第二号』昭37

(47)山とスキーの会編『山とスキー』一

第四十号、第四十二、四十五号、第四十七、五十三号

(48)エーデルワイスクラブ編『Edelweiss 10』昭33

(49)北海道帝大文武会山岳部編『北大山岳部々報』一十号

(50)山を思ふ会編『山を思ふ』一第一輯一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

(51)フェリス登攀会編『FELIS RE-VIEW』昭34

(52)八高山岳部編『山稜』一第一輯(大12)、第二輯(大14)

(53)慶応山岳部編『登高行』一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

(54)熊本大蘇友会編『浅井東一先生追悼録』昭29

(55)沼井鉄太郎著『台湾登山小史』一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

(56)雄冬山附近の山道と漁村風景』一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

(57)日本山岳会編『山岳語彙採集帖』昭11、同山岳会編『山岳遭難救助機関参考資料(一)』一『会報』五四号附録一、昭11、同山岳会編『酒田山小屋建設予定地調査報告』一『会報』第三十七号附録、昭9、同山岳会編『山岳遭難救助機関参考資料』昭10、同山岳会編『ヒマラヤ文獻展目録』昭34、同山岳会編『山岳図書展目録』昭10

(58)佐々保雄著『山の地質学』一『山岳講座』別巻一昭11

(59)『人類学雑誌』一第三九卷三三、大13

(60)『山』一第二巻第五号 梓書房昭10

(61)深田久弥編『ヒマラヤ主要登山年表(未定稿)』

(62)一関高専山岳会編『峰熊』創刊号 昭45 (洋書、次号紹介予定)

岩永氏を囲む会を九月三十日(土)五時から本会ルームで行ないます。多数のご参加をお待ちします。

図書交換即売会は今年で第五回を迎え、十月二十一日(土)に決定、出品しめきりは十月十七日(土)とします。

剣岳・立山・大日岳登山基地

- 9月 じゆうたんを敷いたような雷鳥沢
- 10月 山男の心をゆさぶる新雪の山
- 11月 冬の前・初滑りの雷鳥沢

○定員制(1泊2食1,600円より)

日本山岳会会員証ご持参の方は
特別サービス致します

立山雷鳥沢温泉

ロッジ立山連峰

電話 立山山頂局0764-41-2345

フロント 会員 坂 本 幹

NEW ZEALAND

国鉄山岳連盟
親善登山隊
1971~1972

ダーラン山
群&クック

編成、湯川竜二

(団長、55)

秋山宏明(隊

長、35)

加

藤勝義(副隊

長、43、

医務、齋藤新

一(39)、清水功(33)、

宮原弘之(29)、小柳勝

治(28)、中村浩一(27)、

塚田定徳(25)、佐藤雅

信(24)、

丸山敏郎(24)、成田博

(22)。

登山活動、1229雨、クライスト・チャ

イチ、クインズ・タウン、テ・ア

ナウ、ジョンソン・ホテル(ミルフ

オールド・サウンド)着、三名、ツト

コ・トレールの偵察に向かう。

1230雨、三名増水のため上部偵察不

能、ツトコ・フラットの入口まで。

1231引雨、四名、BC及びツトコ本

流の渡渉地点発見、六名荷上げ。

一九七二年一曇後雨、三名、リマ

リック・クリークからエイジ氷河下端

着、ターナーズ・ビビイ・ロックへ

のルート探索、七名荷上げ、リーダ

一・クリークの対岸にBC建設。

12曇後雨、ツトコ河増水、渡渉不

能、滞在。

13雨後曇、団長他三名、タスマン

氷河へ向かうため下山、全員リーダ

一・クリーク・ケイブに入り、四名

上部偵察。

14曇後雨、一回目の攻撃、途中雨、

ビビイ・ロック入り、荷上げ。

15晴後霧、ツトコ(清水、宮原、

佐藤)、マデライン(齋藤、中村、

塚田)、サイム(秋山、丸山)に登

頂、ツトコ隊は登頂後エイジ氷河で

ビバーク。

16晴一時小雨、ツトコ隊の帰着を

待ち、午後全員BCへ下る。

17晴、BC撤収、

ジョンソン・ホステ

ルへ下山。

18晴、ホームー・

トンネルまでバス、

バリアー・ノブとマ

クファーンソンに登る

J・エド氏を囲んで

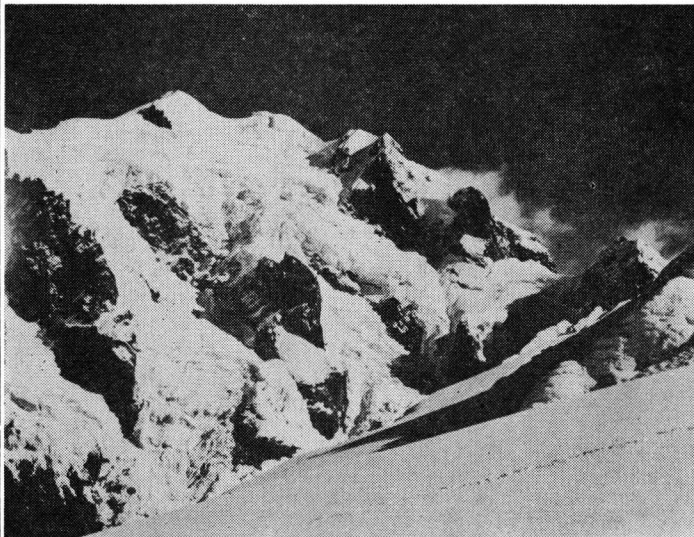
ささやかな宴。

14、タスマン隊四

名、クインズ・タウ



Mt.クック周辺概念図



ン経由、ハミテージ着。

15、タスマン隊、マルテブラン小

屋に入る。

16、タスマン隊、マルテブラン峰

登頂。同氷河でビバーク。

17晴、右隊、マルテブラン小屋に

帰着。

19晴、一部ハースト小屋へ、他は

グランブラト小屋へ、ダーラン隊

最高の快晴の中をハミテージ小屋

に入る。

110晴小雨、クック・ルート偵察。

111晴、クック攻撃編成。

112晴、強風雨、雪、クック隊0時

出発、ツアブリゲン山稜(清水、塚

田、宮原、丸山)、リンダ氷河(秋

山、加藤、齋藤、中村、佐藤)、団

長他グレイシャー・ドームに登る。

午後3時40分頃クック隊全員帰着。

113荒天、滞留。

114強風、晴、フィッシュ氷河を

下る、ハミテージ小屋。

115晴、ハミテージからバスでク

ライスト・チャーチへ。

親善活動

116晴、隊荷整理。

117晴、ウェリントンへ、運輸省公

式訪問。

118晴、ウェリントン駅を中心に見

学。

119晴、代表的急行列車ブルースト

リックに乘車、フランクトンから国

鉄特別バスでロトルア着。

120晴、地熱発電所その他見学。夜

遅くオークランド着。

121晴、ヘロン社主催の

パーティー、NZACのマ

イク、ギル氏に会う。

122晴、空路シドニーへ

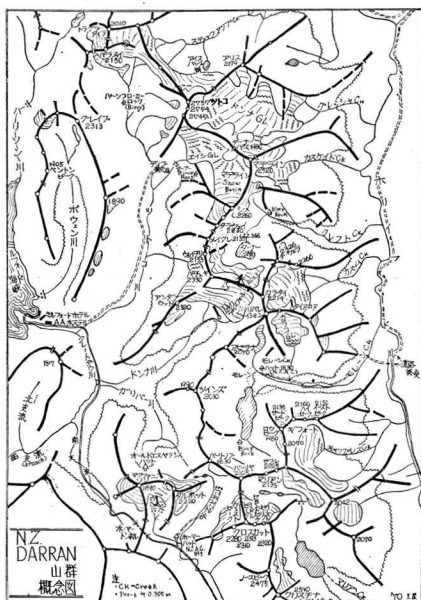
123晴、夜香港。

124曇、ガス深し、滞留

125曇、小雨、羽田着。

(吉沢一郎)

ツトコ峰 (2757m)



NZ DARRAN 山群 概念図



バリアー・ノブ頂上より北方を望む

会務報告

七月理事評議員会

(十四日午後六時半本会ルーム)

△出席者 三田会長 成瀬 吉沢
副会長 中屋 林 伊倉 神原 近藤
松永 須田 坂下 丹部 板倉 岸山
宮下各理事 金坂 望月 佐藤各評議員
今井監事

△議事

・臨時総会の件 (中屋)
十一月十一日(土) 武田名誉会員の追悼式をあわせて行なう。

主な議題は、(イ) 会費値上(案を伊倉理事検討中)、(ロ) 定款改正(成瀬副会長、織田評議員が検討中)となる。

・上高地山岳研究所の件 (林)

六月三十日に地元の安曇建設と正式に契約し、七月七日三田会長以下で地鎮祭を行なった。十月末完成予定。

信濃支部の高山、早乙女両氏に大変お世話になった。募金計画その他は会報七月号に詳しく記載したが、近日中に会長名で趣旨書を発送する。了承

・岩佐氏停年延長の件 (中屋)
事務局の岩佐氏は十一月二十五日停年に達するが、そのまま延長して勤務をお願いする。了承

・名誉会員の作成について
佐藤久一朗会員のデザインになる会章で金の縁取りに決定。

・物故会員に対する弔意規定
一律にお悔み状を出すことにする。

▽報告事項
(1) エベレスト特集の毎日グラフが四百部も残っているので海外の山岳会に寄贈したい。了承

(2) 本年度の年次晩餐会はテンプル着席希望者が多いので、三百名が可能な京王プラザホテルで、一卓十名、中華料理、飲物、税込みで会費は三千円

になる見込み。

期日は十二月二日(土)、司会は中屋理事、別室に『この一本展』会場とバーを設ける。

(3) 支部長会議は秋田支部のいたれりつくせりの準備で、参加者九十名を超える盛況で、全員鳥島山に登った。

なお来年度は北海道十勝の予定。成瀬副会長は途中岩手支部を訪問、笠原支部長はかと懇談、非常にまとまりのある支部との印象を受けた。

(4) 熊谷市立図書館よりエベレストの記録の寄贈依頼があったが、残部も少ないので中島理事に一任。

(5) 熊本支部の移転通知があった。

(6) 図書委員より、九月末に山岳第三号覆刻(三百部限定 千八百円)発行・十月二十一日図書交換即売会・年次晩餐会の、この一本展は『武田久吉展』とする。

・若水雄雄氏寄贈図書の四百一点は談話室に置く。

・九月三十日(土)五時からルームで岩永さんを囲む会を開く等の報告。

(7) 海外委より、ドイツのユースキヤン参加とりやめたいとの報告あり

(8) 青年懇談会より、八月十日〜二十日まで酒沢に天幕を張り、キーパーも置くので会員諸兄多数の参加を希望する。最初の一泊のみ五百円。炊事道具その他あり、等の報告があった。

八月理事評議員会は休会
九月一日(金)常務理事会 九月八日(金)理事評議員会開催とする。

図書室便り(昭和47・7)

新刊図書受入報告

二見書房寄贈 (1)三田幸夫著『山なみはるかに』昭和47

スキー・ジャーナル寄贈 (1)草の実会山岳部編『女だけの山旅』昭和47

時事通信社寄贈 (1)P・スチール著・丹部節雄訳『エベレスト南壁』丸国

際隊の悲劇』昭和47

山と溪谷社寄贈 (1)瓜生卓造著『知床の旅』昭和47

ナカニヤ出版寄贈 (1)芝村文治著『秘境・奥美濃の山旅』昭和47

あかね書房寄贈 (1)安川茂雄著『アルプスの山旅』昭和47

白水社寄贈 (1)近藤等著『アルプスの空の下で』昭和47

北日本新聞社寄贈 (1)橋本広著『越中の峠』昭和47

東京新聞社寄贈 (1)岳人編集部編『世界の名峰』昭和47

三笠書房寄贈 (1)安川茂雄著『氷壁に生きる』昭和47

朝日新聞社寄贈 (1)朝日新聞社編『探検と冒険2』昭和47

定期刊行物受入報告
【部報・会報類】

(1)山村民俗の会『あしな』No. 132 (47-4)

(2)広島大学医学部山岳会『山岳部』岳友』No. 5 (47-12)

(3)北海道自然保護協会『会報』No. 12 (47-6)

(4)兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 62 (47-7)

(5)山の自然を考える会『会誌』No. 9 (47-7)

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 567 (47-7)

(7)東京野歩路会『山嶺』No. 565(47-5), No. 566(47-6), No. 567(47-7)

(8)日本山岳会『山岳研究』No. 16 (47-7)

- (9)低く山を歩く会『低山』No. 84(47-6), No. 85(47-7)
- (10)神奈川県山岳連盟『やまの木』No. 25(47-7)
- (11)日本山岳協会『登山月報』No. 40 (47-7)
- (12)横浜山岳会『山』No. 479(47-5), No. 480 (47-6)
- 【雑誌】
- (1)『アルプ』No. 173(47-7)
- (2)『地図』No. 38, Vol. 10
- (3)『岳人』No. 302 (47-8)
- (4)『岩と雪』No. 26 (47-8)
- (5)『山と溪谷』No. 407 (47-8)
- (その他)
- (1)福岡県山岳連盟『福岡ヒマラヤ登山隊計画書』
- (2)玉川機械金属株式会社山岳部『やまの心』No. 3
- (3)尾瀬の自然を守る会『尾瀬ニュース』No. 6 (47-7)
- (4)連峰スカイライン反対連合『連合だより』No. 3
- (5)仙台一高山の会『高嶺』No. 9, No. 10
- (6)第一法規出版『文化財』(47-7)
- 【新著海外雑誌】
1. "Alpinismus" 72-5, 6.
2. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Mai, 72.
3. "The Canadian Alpine Journal" Vol. 55, 72.
4. "Deutscher Alpenverein" Jah. 24, Hef. 3, Mai/Juni, 72.
5. "Mountain" No. 20, March, 72.
- ルード誌(47年7月)
- 4日(火)常務理事会
- 7日(金)会報編集委員会
- 10日(月)稲門山岳会
- 11日(火)図書委員会
- 13日(木)青年懇談会
- 14日(金)理事評議員会
- 20日(木)第二八四回小集会 拓殖大 学ヒンズークシ・ヒマラヤ遠征報告 菊池修身
- 電通大第一次ヒマラヤ學術登山隊報告 西山忠成
- 22日(土)会報編集委員会
- 26日(水)青年懇談会 集委員会
- 27日(木)山研委員会
- 28日(金)山研委員会

七月中来室者 四二八名

会員異動

退会会員(47年7月)

七四五 Thomas E. Woodhouse
物故会員

六四五一 奥山 章 昭和四七・七・二逝去

故武田久吉氏に從五位 本会名誉会
員故武田久吉氏は、六月七日、從五位に叙せられた。

『Keep Japan Clean』

全員元気でカナディアン・ロッキーの山々で活躍しています。

六月二十一日、バンクバーにつぎ二十五日に Banff とつう山の町にデントを構えました。それからは毎日のようにルート研究や情報収集に歩きまわり、今日までに Rundle, Edith, Cory の三峰を登りきった。Rundle は最初 Summit Ridge とつうパリアンテよりアタックしましたが、中途に終わりノーマンルートより登頂いたしました。Edith はイージークライムに終始しました。Cory はルートファインディングの面白い山でこれからのロッキーの山旅に良い勉強になりました。こちらの山は標高は低くとも高緯度にあるため一〇〇〇ft の山でも富士山よりも高く感じます。

明日から Lake Louise という、すばらしいビークがひしめいている所に向かいます。初めて氷河の上に立つわけです。

カナダという国は、とても自然も大切にしている国で、ファイア・バーミット

をもらうと同時にゴミを入れるポリ袋をくれます。そして、スーパーマーケットの袋に『Keep Canada Clean』と印刷されています。

われわれも帰国したら、JAC学生部を中心にKeep Japan Clean運動をはじめようと決心しています。

七月四日 Banffにて
(カナダ学生登山隊)

お知らせ

第二八六回小集会

日時 九月二十日(水)

映画会「エベレスト

国際登山隊」

場所 千代田公会堂

入場料 無料

第二八七回現地小集会

ハイキング

日時 九月二十四日(土)

二十五日(日)

場所 東山湖キャンプ場

会費 二〇〇〇円

交通 御殿場駅→東名高速

バス御殿場インター下車

第二八八回小集会

パネルディスカッション

『日本山岳会会員としての意識と自覚』

日時 十月二十日

場所 本会ルーム(金)

婦人懇談会主催

鳥海山の秋を味わう会

十月七(土)、八(日)、

九(月)、十日(火)の飛

石連休を利用して吹浦の会

員、岡部みち子さんのお世

話にて、駒止山荘で懇談

を行ないます。ふるってご参加ください。参加希望者は九月二十日まで本会ルームへお申し込みください。詳細は追ってご連絡いたします。

係 斎藤桂、須田紀子

第十五回もみじ会のお知らせ

日時 十一月四(土)、五日(日)

場所 南アルプス大日高原

申し込み 参加申込みの方は支部宛

(宛先 千四二〇 静岡市東鷹匠町五

の二四 山本朋三郎方 電話 〇五四

二一四五―六三九〇) 十月二十日ま

でにご連絡ください。

四日、静岡市役所前に集合、貸切バ

スにて大日高原井川青少年キャンプセ

ンターへ。五日、三ツ峰七ツ峰―大間

福養の滝―大間(バス)―静岡へ。

富士と南アの眺望台、井川キャン

プセンターに一泊し、朝霧をとかず朝日

を背にうけながら三ツ峰から、名鳥

墨が水あびをした福養の滝へ徒歩四時

間の軽い山行を計画。山行に参加さ

れない方は、接阻峠、寸又温泉へ行か

れてはいかが。バスは二日借切です。

で懇親会のみ参加の方も利用可です。

訂正 会報「山」第三二六号ハ―デ

イ夫妻立山を歩く、立山黒部アルペン

ルート中、黒部観光K・Kならびに立

山黒部観光光会社は、立山黒部観光光会

社につき訂正、また、同三二六号第十

一回有志懇談会出席者氏名中、佐藤久

一郎は佐藤久一朗につき訂正、お詫び

いたします。(編者)

昭和四十七年九月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三―二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 坂下 心一

(233) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

JALPAK 特別ヒマラヤ山岳とインドの旅 14日間

世界の屋根を旅する

第3回ヒマラヤ山岳とインドの旅

- エベレスト山群のまっただ中に完成した
エベレスト・ビューホテル 3泊
- ツアーリーダーは日本山岳会々長
三田幸夫氏
- 同行シェルパはエベレスト登頂者
チヨタレ氏
- 医師同行、酸素ボンベも用意しておきます。



団長：三田幸夫氏

期間：昭和47年11月4日～11月17日 費用：¥368,000(ローン可)

日程

- | | |
|--|---|
| 1日目：東京→バンコック | 7日目：エベレストビューホテルから
ルクラへ徒歩で約7時間 |
| 2日目：バンコック→カトマンズ
午後市内観光 | 民宿またはテント泊 |
| 3日目：カトマンズ→ルクラ、ルクラ
から徒歩にてゾサレへ、キャ
ンプ泊 | 8日目：チャーターフライトでルクラ
→カトマンズ、午後カトマン
ズにて自由行動 |
| 4日目：ゾサレからナムチェバザール
経由徒歩にてエベレストビュー
ホテル(泊) | 9日目：カトマンズ→ポカラ
マチャブチャレ、ダウラギリ、
マナスル等の眺望を楽しむ |
| 5日目：エベレストビューホテル滞在
エベレストをはじめとしヌブ
ツェ、ローツェ、アマ・ダブラ
ムの眺望を楽しむ | 10日目：終日自由行動 |
| 希望者はタンボチェ、ゴーキ
ョヘトレッキング | 11日目：午前中自由行動
ポカラ→カトマンズ |
| 6日目：(希望者は第6日目ルクラへ向
い途中、民宿またはテント泊) | 12日目：カトマンズ→ニューデリー |
| | 13日目：特別バスにてアグラ観光、タ
ジマハル等を見学 |
| | 14日目：ニューデリー→東京 |

○申し込み、問合せ先

三井航空サービス (03)504-0271

東京都港区新橋1-18-1 団体課/須山

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

＜菊判280頁＞定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

＜A 5判482頁＞定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

＜四六判400頁＞定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

＜B 6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

＜B 5判206頁＞定価2,800円

いろいろばた

南会津山の会

＜B 24どり判320頁＞定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編

＜A 6判368頁＞定価750円

山 岳

日本山岳会編

＜A 5判＞

総索引 1,000円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A 5判リング綴り＞定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

＜B 6判202頁＞定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

＜A 5判440頁＞定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

＜菊判362判頁＞定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

＜菊判584頁＞定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A 変型208頁＞定価3,600円

アンナブルナ日記

京都大学学士山岳会編

＜A 12取変型判170頁＞定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

＜A 5判350頁＞定価900円

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店

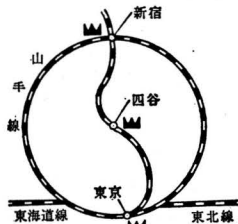
山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはし

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
そして登山ですから
どうして必要なものを
をこしらえてやる
まじはもっています

かたるぐンテイ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440